

(実践報告) 抄録用紙

演題名 (全角 80 字以内)	沖縄・宮古島での外出支援 ～訪問リハビリでの介入も含めた当診療所での取り組み～
演者名	吉岡裕太、泰川恵吾、曾我幸弘、清水武志、井澤菜緒子、豊崎恵子
所属	ドクターゴン診療所

【はじめに】沖縄本島から南西へ約 300km。我々の住む宮古島は青く澄んだ海と色とりどりの珊瑚礁に囲まれた美しい島である。

その中で当診療所は島の南端にあり訪問対象患者 140 名を抱える在宅療養支援診療所として周辺離島も含めた宮古島市全域で、訪問診療・看護・リハビリを包括的に展開している。

当診療所では単に診療・看護・リハのみならず患者や家族の希望に沿った外出支援も積極的に行っており、医師や看護師、リハ専門職が連携を取り合いながら患者・家族の外出等の希望実現をサポートしている。

【目的】我々が日々訪問業務を行う中で、ふとしたきっかけで患者や家族から『○○してみたい』、『○○に行ってみたい』などの言葉を聞くことがあり出来るだけ迅速に計画・行動に移すとともに訪問リハビリでも外出に必要なプログラムを取り入れ実施している。今回は特に印象に残る 3 例を挙げ当診療所での取り組みを訪問リハビリでの介入等も含めながら検証・紹介する。

【対象】当診療所において訪問診療・リハ対象となっている患者 3 名。CaseA : 90 代男性 パーキンソン病 Hoehn-Yahr V、CaseB : 50 代男性 肺癌末期、CaseC : 50 代男性 交通事故による脊髄損傷(Th8)完全対麻痺

【実践】CaseA : 昔自分の船を係留していた海を見に行きたい！、CaseB : 介入しているスタッフと是非とも飲みに行きたい！、CaseC : 10 数年間自宅に閉じこもりきり。海へ行ってみて見たいな～。

【考察】外出支援には普段の些細な会話の中から本人・家族の想いを汲み取り、出来るだけ早期に計画・実行に移すことが必要である。今後も患者本人や家族の想いに寄り添いながら希望の実現に向けて取り組みを継続していきたい。